教科又は教職科目，教職教養課題特講Ⅱ

少年問題を考える

社会科教育講座・川岡勉

１．授業の概要

この授業は，現在の若者・少年問題の現状から出発し，学校とは異なる場で子どもの問題と向き合っている方々の活動から学び，問題解決に向けた意欲・態度や実践的な指導力を育成することを目的としている。そのために，愛媛県内外の少年問題に関わる専門家や経験者等の講話を聞いて知識・理解を深めるとともに，学生自ら問題解決に向けた対策教育プログラムを構築させる時間を設けた。

到達目標として掲げたのは，(1)少年問題・犯罪の実情について深い知識理解がある。(2)講師の方々の実践を通して実践的な問題解決を志向する態度がある。(3)少年問題・少年犯罪の解決に向かう実践的な自己教育課題を見いだすことができる，の３項目である。

関連するＤＰは，教育をめぐるさまざまな現代的課題について論じ，適切な対応を考えることができる（思考・判断），自己の学習課題を明確にし，理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる（関心・意欲）である。

受講者は，学校教育教員養成課程の学生が60 名，特別支援教育教員養成課程 12 名，総合人間形成課程４名，スポーツ健康科学課程３名の合計 79 名であった。学年はすべて３回生である。授業の構成は,次の通りである。

① オリエンテーション
② 少年犯罪・非行の現状
③ 青少年のインターネット犯罪とその現状
④ 学校における不審者対策について
⑤ 女性の犯罪被害とその対策
⑥ 薬物乱用防止・非行防止教室
⑦ 犯罪被害の支援について
⑧ キッズ・タクティール
（スウェーデンの犯罪被害対策）
⑨ グループワーク―資料作成（１）
⑩ 子どもたちの問題と向き合って
⑪ グループワーク―資料作成（２）
⑫ グループワーク発表（１）
⑬ グループワーク発表（２）
⑭ グループワーク発表（３）
⑮ まとめ

授業の進め方としては，外部講師の講話と学生たちのグループワークを組み合わせた。外部講師として招いたのは，②～⑥は愛媛県警の担当者，⑦は犯罪被害者の遺族，⑧はスウェーデン人の講師，⑩は児童自立支援施設えひめ学園の職員である。

グループワークでは,「子どもたちの〈問題〉と向き合う教師へ」というテーマで，講話の内容をふまえたプログラム開発・授業案作成に取り組ませた。各グループが取り上げたのは，子どもの交通安全指導，薬物乱用防止プログラム，聴覚障害児に対する防災教育プログラム，市役所に自分たちの改革案を提出しよう！！―自転車について考える―，いじめのない学級作り，防災教育，外国に学ぶいじめ対策，ＳＮＳ（ソーシャルネットワーキングサービス）の危険性について,「交通安全」について考える―ワークショップを用いて―,みんなで作る安全な町―まもるくんを探せ―,子どもの運動､遊び不足とその解消をねらう教育，中学生のための情報教育，防災教育とその重要性,という 13 のトピックであった。

この授業は今年度から新しいメンバー（新教育コーディネーターの川岡勉・吉村直道・山本久雄）が担当することになったため，旧コーディネーターが前年度まで積み上げてきたやり方を基本的に踏襲する形で実施した。

毎回の授業後に提出させたミニレポートと,グループワークの発表をもとに成績評価を行った。

２．アンケート結果

最後の授業終了後に授業評価アンケートをとり，69 名の学生から回答を得た。

まず，この授業は教員にふさわしい資質を育てる上で役にたつと思うかを問うたところ,「強くそう思う」(8.7％),「まあそう思う」(85.5％),「あまりそう思わない」(5.8％),「全くそう思わない」(0％)という結果であった。判断した理由を尋ねると，普段の授業では扱われない少年問題のリアルな現状に関する話が聞ける，警察をはじめ教育関係者以外の人から様々な経験を生で聞くことで視野が広が

り教育にとっても資するところが大きい，グループワークを通じて少年問題の解決策を自分なりに考えることができる，自らの行動を見直す機会にもなる,などの声が寄せられた。

次に，②～⑧・⑩とＧ(グループワーク)について次年度も設けるべきか尋ねたところ，②④⑤⑥⑦⑧及びＧでは「まあそう思う」という比率が最も高い(50％前後)のに対して，⑩では 62.3％，③では 59.4％の学生が「強くそう思う」と回答している。「強くそう思う」の比率が低かったのは⑤(18.8％)･⑦(29.9％),「あまりそう思わない」の比率が高かったのは⑤(17.4％)・⑦(16.4)，低かったのは②(0％)・⑩(1.4％)であった。「全くそう思わない」は⑤⑦⑧とＧに対して各１名が○をつけただけであった。

以上から，特に⑩③②の順で支持する学生が多いことが分かる。児童自立支援施設の取り組みが学生の共感を得たこと，インターネット犯罪と少年非行の現状に対する関心が高いことが読み取れる。⑧のキッズ・タクティールについても，興味深かったと書いた学生が少なくない。グループワークも概ね好評である。⑤⑦は相対的に支持率が低いが，それでも過半数は次年度に設けることに「まあそう思う」と回答している。

この授業を受講してよかったかを問うたところ，「強くそう思う」(13.2％)，「まあそう思う」(79.4％)，「あまりそう思わない」(7.4％)，「全くそう思わない」(0％)という結果であった。自身が意欲的・積極的に取り組んだかを問うと，「強くそう思う」(13.2％)，「まあそう思う」(76.5％)，「あまりそう思わない」(10.3％)，「全くそう思わない」(0％)という回答結果であった。シラバスの掲げた到達目標を達成できたと思うかを尋ねると,「強くそう思う」(0％)，「まあそう思う」(89.4％)，「あまりそう思わない」(10.6％)，「全くそう思わない」(0％)という結果が得られた。

上述項目の判断理由を書かせたところ，全体を振り返ると少年問題に対する考えが深まり自己の課題もよく見えるようになった，実際の教育現場において役に立つ実践的な知識や情報が多数あり貴重な体験活動もできた，講師の話を真剣に聞いてミニレポートをきちんと提出した，プログラムの作成・発表に意欲的に取り組んだなどの記述がみられる一方で，講話に対しては受け身になることが多かったという反省も寄せられた。

この授業の問題点，改善すべき点を問うたところ，講話が断片的でつながりに欠ける，警察官養成の授業ではないので講話をもっと整理し授業目的をきちんと講師に伝えるなどして充実させて欲しい，県警サイドからだけでなく学校現場からの話も聞きたい，県警の情報を学校の現状や対策と組み合わせて学ぶ工夫ができないか，講話をふまえて学生どうしがもっと意見交換をする時間が欲しい，ミニレポートの作成に時間的余裕もたせるため提出期限を延ばして欲しい，グループワーク発表会に対する感想・意見をフィードバックして欲しい,などの意見や注文が寄せられた。

３．総括

全体として授業の目的にふさわしい構成であり，講話だけでは受け身に陥りがちとなるが，学生自身によるプログラム開発を組み合わせることで主体的に考えを深める機会が持てたのはよかった。圧倒的に多くの学生が教員にふさわしい資質を育てる上で役に立つ，受講してよかったと回答していることは，この授業の教育的意義を示すものと言えよう。９割の学生が到達目標の達成状況に「まあそう思う」と回答しているのも，授業の成果を表している。

但し，学校現場以外の視点で少年を取り巻く諸問題を考える貴重な機会であったという評価がある一方，それを踏まえて学校現場ではどのような対策をとるべきか知りたい，現職教員の話も聞きたい，という声が高い。教職につく志向性の高い学生が受講していることからすれば，当然の要望と言える。このあたりは，教育実践研究Ｉや生徒指導論などの授業と提携を考えていくことも必要となろう。

グループワークについては，主体的に関わることができてよかったとする声がある一方，取り上げるプログラムの内容，発表のもち方・時間配分などに関して，もう少し工夫が必要と思われる。グループワーク報告書は，前年度のものに比べると，質量ともに見劣りするのは否めず，より充実したプログラム開発に向けてテコ入れを図る必要がある。

次年度以降，学生どうしの意見交換の機会の拡充，ミニレポートの提出方法の見直し，グループワークに関するフィードバックの方法など，さらに学生の学習意欲を高めていくための改善を重ねていきたい。